

## MACF礼拝説教要旨

2023年3月5日

ルカによる福音書

「迷子の羊と羊飼い」

1徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。

2すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。

3そこで、イエスは次のたとえを話された。

4「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。

5そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、

6家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。

7言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

\*\*\*

この章でイエス様は例えを3つ、正確には4つお話ししています。

そして、それには前提がありました。

1徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。

2すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。

と書かれているとおりです。

当時の宗教者たちにとって、罪人というレッテルを貼られた人たちの存在は意味のない存在でした。どう頑張っても神の救いを受けることなどできるはずがない人たちと宗教者たちは決め付けていました。

その中には「徴税人、漁師、病人、そして娼婦としてしか生計を立てることができなかった人たち、異邦人」その他、いろいろな人たちが罪人としてレッテルを貼られて生きていました。

しかし、イエス様はそれらの人たちの仲間のように一緒に食事をするのがあったのです。しかも彼らはイエス様のお話を真剣に聞こうとしていました。

宗教者たちの批判を受けて、イエス様はたとえを話されました。

今日はその最初のお話しです。

## 1)100匹のうちの1匹が迷子になった

もし、皆さんの家で飼っている猫や犬が行方不明になったら、どんな気持ちになるでしょう。時々電柱などに迷子の犬や猫の写真の入った貼り紙がされていることがあります。

「あー、このご家庭にとって、この犬（猫）は家族同然だったんだろうな」と思います。どのくらいの確率で見つかるものなのかよくわかりませんが、飼い主の気持ちを考えると、いたたまれない気持ちになっているだろうと思います。

当時の羊飼いの多くは「雇われて羊の世話をする」仕事を請け負っていた人たちだったと言われています。移動するため、安息日が守れなかったので罪人扱いされ、社会的には住所不定ですから裁判の証人にもなれませんでした。となると、彼らの友達と一緒に働いている羊飼いたちと、羊たちでした。羊たちは一緒に長い時間、同じ方向に向かって歩いたり、留まったりしていますからまさに「移動家族」としてそれぞれがいなくてはならない存在だったはずです。

この話の中では「羊」の所有者が主役ですから、雇われた羊飼いよりはるかに羊の存在の大切さを知っている人です。

他者からみたら取るに足りない存在。

でも、飼い主にしたら、大事な大事な存在。

さて、その中の1匹が行方不明になってしまったわけです。

## 2)必死に探す羊飼いと迷子の羊

羊は、おそらく一生懸命自分の頭で考え、良かれと思ってどんどん迷いの道へと進んでいったのだと思います。

羊飼いが目を離したスキに、どんどん進んでしまった可能性もあります。

実は聖書の中には人間が羊として語られているのですが、同時に、羊飼いのような役割を託された人たちもいることが示されています。でも、その羊飼いの役割を託された人たちがその役目を放棄し、自分の私利私欲を追い求めて羊である民が散り散りになってしまったことが記録されています。

エゼキエル書34章です。

1主の言葉がわたしに臨んだ。

2「人の子よ、イスラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧者は群れを養うべきではないか。

3お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。4お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、苛酷に群れを支配した。

5彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになった。

6わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う。また、わたしの群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す者もなく、尋ね求める者もない。7それゆえ、牧者たちよ。主の言葉を聞け。

8わたしは生きている、と主なる神は言われる。まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、自分自身を養っている。9それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。10主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

11まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。12牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。

つまり、「あいつらは罪人だ」と言って軽蔑する心こそ、羊から居場所を奪うものであり、本来近くにいられたはずなのに、遠くの方に迷い出ていってしまうことになったのです。イエス様はヨハネによる福音書の中で「私は良い牧者です」と宣言していますが、まさに失われた羊を探し求める神様ご自身の姿が浮き彫りにされてきます。

3)探し出されて存在を喜ばれる羊

この迷子の羊が見つげ出され、助け出されて、不思議なことを経験します。

思うに、この羊は自分のわがままや、自分の無責任な行動を責められ叱られると

思っていたのではないかと思うのですが、この物語には、そう書いてはありません。逆に「見出されたことを大喜びしている羊飼いと隣人の姿が描かれているのです。

しかも「悔い改めた羊」として理解されているのです。

羊は何をしたのでしょうか。

羊は勝手に迷い込み、落ち込み、どこにいるのか、どこに行くのか分からない状態でした。

そこに羊飼いが必死になって探し出し、やってきてくれました。

そして、おそらく羊を抱き上げ、そのまま家に連れて帰ってきたのでしょうか。

そのどこが悔い改めなのでしょう。

悔い改めとは「方向転換」という意味です。

自分勝手に歩いていた羊が、羊飼いに発見してもらって、抱き上げられた時今まで羊がみていた世界がひっくり返りました。

「羊飼いがいる場所に連れ戻された」

それだけです。

私の今いる場所は「羊飼いが望んでいる場所とは違う」と気づいて助けを求め

「羊飼いがいるところに連れ戻してもらおう」こと、それが悔い改めです。

あるいは悔い改めの出発点と考えることができると思います。

あなたは今、どこにいますか？

\*\*\*

礼拝映像はこちらです

[https://youtu.be/hmB5\\_eYWzel](https://youtu.be/hmB5_eYWzel)